

目的 子供は家庭に生まれ、そして家庭を生活の中心の場として成長する。それゆゑに、家庭を場として学ばれる家庭教育は、すべての教育の基礎になる最も大切な教育であるといえる。本研究では、このような重要性を帯びて居る家庭教育について、そのあり方や方法を考ふるために、わが国における家庭教育の史的研究所を行つたのである。今回は江戸時代中期の俳人、常盤貞尚の家庭教育論を考察することをした。

方法 本研究では、貞尚の著作である民家分骨記、民家言蒙解なども分析して、家における親と子の関係、親のあり方、子のあり方、夫婦関係等を中心に考察をした。

結果 ① 親と子の関係については、親の養志に対する子の報恩としての、孝行の徳が基本になると貞尚は主張している。

② 母親ばかりがなくて、父親の家庭教育の責任も明確にしている。

③ 家族制度から必然的にみられる家長夫婦と子供夫婦の関係についても民家的な立場からの見解を貞尚はもっている。

④ 家庭教育において最も大切なことは、家庭内の和合であり、そのためには父親と母親のハート・トゥ・ハートの安定化が重要であると主張している。母親と父親が相互に敬愛し合っている状態の時、家庭教育は内容的にもよく展開することか可能なのであると主張している。